アリストテレスにおける「ヒストリアー」

—— 予備的考察 ——

赤井　清晃

Kiyoaki AKAI

小論は，アリストテレスがその著作中で，たとえば名詞形で ἱστορία という語を使うとき，ἱστορία の対象や方法はどういうものであるのかということを調べることによって，学問的知識が獲得される過程において ἱστορία が占める位置や役割を明かにしようとする試みである。ところで，アリストテレスの著作を「コルプス」に限れば，名詞形，動詞形などを含めて，ἱστορία とその関連語は，44ヶ所にしか現れない[1]。しかも，名詞形（複数）の多くは，書名としての『動物誌』を表すものである。このように使用頻度の低い語がどれほどの重要な意味をもっているのかという疑問が生じるかもしれない。実際，アリストテレスにおける ἱστορία をテーマにした研究はそれほど多くはない。けれども，私見によれば，ἔνδοξα, ἐμπειρία などと並んで，ἱστορία は，アリストテレス流の学問的知識すなわち論証知が成立する過程においてある重要な役割を果していると思われる。これが小論が ἱστορία をテーマとする理由である。さて，Riondato によれば[2]，アリストテレスにおける ἱστορία は，以下の3つに分類される。

1) 人間の行為の記述
2) 動物などの自然の実在の記述
3) 可感的な個別の事象の観察

これらの内，1) は，いわゆる「歴史記述」に，2) はアリストテレス自身の「生物学」関係の著作に該当すると考えられるが，3) はある意味では，1) にも 2) にも該当するものである。それは，1) と 2) が対象の違いによる区別であるのに対して，3) は 1)，2) の対象の分類基準とは別の基準から分類されているからで

[1] 浜岡剛氏の協力による，TLG および Pandora を用いた電子計算機検索の結果である。

[2] Riondato, p.51.

ある。従って，一見すると，この3分法は3分法ではなくて，1) と2) の2分法で十分であるように思われる。そこで，以下に，典拠となる箇所を参照しつつ，この分類の妥当性を検討して，ἱστορία の対象や方法を調べる手掛りにしたい。

1 人間の行為の記述

人間の行為を対象として記述することは，歴史家と詩人を対比することによって次のように語られる。

> 「歴史家と詩人の違いは，この点，つまり，歴史家は実際に起こった出来事を語るのに対して，詩人は起こるであろうような出来事を語るという点にある。それ故また，詩作は歴史 ἱστορία よりも，より哲学的でありより価値のあるものである。というのは，詩作は普遍的な事がらをより一層多く語るが，歴史は個別的な事がらを語るからである。」(*Poet.* c.9, 1451b4-7)

この箇所で重要なことは,「歴史は個別的な事がらを語る」とされている点である。そして，この直後の箇所で説明されているように,「個別的な」ということの意味は，実際にアルキビアデスならアルキビアデスという人物が何を行ない，あるいは他人から何をなされたかということである。歴史家は起こった個別的な出来事をそのまま連結して書き連ねるだけで[3]，出来事の原因について独自の考察を交えないという点で，詩人よりも哲学的ではないという主張が，引き合いに出されているヘロドトスに当てはまるか否かはここでは問題ではない。Riondato は，アリストテレスの言う「歴史（記述）」は，出来事（事績）res gestae そのものではなくて，出来事（事績）の物語 historia rerum gestarum であるとしているが[4]，その理由は，この箇所では，歴史家が個別的な事がらを語るにあたって，直接の経験知に基づいているのか，伝聞によるのかという区別は問われていないことによるのであろう。

また，詩作がより多く語るとされる「普遍的な」事がらの「普遍性」は，確かに詩人によって創作され，語られるのであるが，しかし，原理的にはその根底に，人間の行為についての「個別的な事がら」があって，そこから何らかの帰納推理によって「普遍的な事がら」が導き出されると考えられる。この「普遍的な事がら」を導出する作業を詩人として創作を通じて行なえば，それは詩作であるが,「個別的な事がら」に基づいて，何らかの推理によって行なうならば，それは例えば，法の制定にかかわることならば，政治学が行なう作業である[5]。「普遍的な事がら」と「個別的な事がら」の関連についてはまた，次のよ

[3] *Rhet.* III, c.9, 1409a27-31.

[4] Riondato, p.54-55.

[5] *Rhet.* I, c.4, 1360a30-37.

うな記述がある。

> 「(国家の財源について) 自国の経験 ἐμπειρία だけからは，これらのことを，その全体に目を行き届かせる συνορᾶν ことはできないのであって，これらのことについての助言のためには，他国の人々によって発見された方法にも探究の目を向ける ἱστοριχόν ことが必要である。」(*Rhet.* I, c.4, 1359a30-32)

ここでは，先に指摘しておいた，記述が直接の経験知に基づいているのか，伝聞によるのかという区別が問題になってくる。つまり，自国の（しかも同時代の）出来事については，直接の経験知に基づくことが可能であるが，それ以外の出来事については，直接の経験知に基づくことはできない。そこで，他人が残した記述に依存することになる。引用箇所の例では，国家の財源という問題について，現在の自国の場合について，それ自体は個別的なものであるが，適切な助言をするためには，問題となっている事がらの全体に目を行き届かせる必要があり，それは「個別的なもの」を通じて「普遍的なもの」を見抜くためである。この箇所で,「探究の目を向ける」と訳した ἱστοριχόν は，ある問題に関して，何らかの目的をもって，個別的な事実を調査・探究するという意味であり，これは，次に見る「自然の探究」が，自然の実在を対象とするのに対して，対象が人間の行為である点で違っているだけである。

2　動物などの自然の実在の記述

前節で見たように，人間の行為を対象にして，起こった出来事を語る場合，それは我々の言葉で言えば「歴史（記述）」なのであるが，出来事を書き連ねるだけならば，詩作と比較して消極的な評価を受けていた。しかし，その「歴史（記述）」が，ある問題に関して，何らかの目的をもって，個別的な事実を調査・探究するという意味でなされたものであれば，著作としてではないとしても，一種の調査記録としてなくてはならないものであると言える。では，自然の実在を対象とする場合はどうであろうか。

> 「さて，これらのことは，このように今は概略的に述べられたが，それはどれだけのものについて，どれだけのものを考察するべきかを前以て味わうためである（後に我々は厳密に語ることにしよう）。それは最初にすべての動物に内在する差異と属性を把握するためである。その後で，それらの原因を発見するように努めなければならない。というのは，個々のものについての探究 ἱστορία から始めた上で，このような手続きを行なうことは事がらの本性に即しているからであり，それというのも，論証が何についてなされ，何からなされるかが，これ

らのことから明かになるからである。」(*HA* I, c.6, 491a7-14)

この箇所では,「個々のものについての探究から始める」ことが事がらの本性に即している，と言われているが，具体的には，始めに「個々のもの」つまりここでは，個々の動物について，それらすべてに内在する差異と共通する属性を見てとり，その後で，その原因を発見する，ということである。では,「個々のものについての探究」はどこまでを指すのかというと，まず考えられるのは,「個々の動物について，それらすべてに内在する差異と共通する属性を見てとる」という部分である。しかし，ここには「探究」[6] と訳した ἱστορία の意味に関して問題がある。人間の行為を対象にして，起こった出来事を語る場合には，一種の調査記録そのものを指すが,「探究」という場合には,「探究する」という行為を指すので，アリストテレス自身が頻繁に言及する著作名としての『動物誌』のようなものだけを指すわけではない。そうすると,「その後で，その原因を発見する」という部分は「探究する」という行為に含まれるのかどうか。一般には,「始めにそれぞれの動物に見られる現象をあげ（『動物誌』），次にその原因を述べ（『動物部分論』），その後で生成を論じる（『動物発生論』）」[7] という順序が考えられるので，この箇所での「探究」には,「その原因を発見する」という部分は含まれないことになる。しかし，この場合の「探究」は，この「探究」に基づいて，原因を発見し，さらに，論証を目指している点が，単に起こった出来事を語る，いわゆる「歴史（記述）」とは違っている。だが,「原因の発見」までも含んだ広い意味での「探究」を指すと考えられる，次のような箇所もある。

「… これら両方の理由によって，魂についての探究 ἱστορία を第一級のものどもの内に位置付けることは当を得たことであろう。」(*De An.* I, c.1, 402a3-4)

この箇所の「探究」が『デ・アニマ』という著作全体を指しているのであり,『デ・アニマ』第 1 巻の「霊魂」についての学説史的な部分だけを指しているのではないとすれば，明かに，この箇所の「探究」は単に「個別的な事がら」の記述だけではない。実際，例えば，Siwek[8] は，この箇所の ἱστορία について，a) ある出来事についての物語 narratio de aliquo eventu, b) ある問題に対する学問的探究 indagatio scientifica in aliqoud problema, c) ある学問の方法論的開陳 expositio methodica alicuius scientiae という 3 つの意味の内，b) ある問題に対する学問的探究という意味で言われているとしている。そうだとすれば,「探究」の対象を，人間の行為や，動物などの自然の実在などに限定せずに，一般に学問が成立しているそれぞれの分野において,「探究」ということが考えられ

[6] Bourgey, p.73, n(6) を参照。
[7] *PA* I, c.1, 640a14 以下。
[8] Siwek, p.241, 註 6 参照。Düring, S.508-509 も参照。

るのは当然のことであろう。

3　可感的な個別の事象の観察

そこで，一般に学問が成立しているそれぞれの分野において，「探究」はどのような役割を果すのかを考えてみたいのだが，次の箇所は，「経験」または「経験知」と同じ意味で ἱστορία という語が用いられ，さらに，論証や，問答法との関係を示唆している点で重要である。

> 「大多数の原理は，個々の学に即した固有の原理である。それ故，個々の事がらについての原理を与えることは，経験 ἐμπειρία に属する。私が言っているのは例えば，天文学に関する経験が天文学上の知識の原理を与えることであり（というのは，天文学上の諸現象 φαινόμενα が十分に採取されたならば，天文学上の諸論証 ἀποδείξεις はそのようにして発見されたからである），そして，他のどんな技術や知識についても同様である。従って，もし個々の事がらについて，命題の項として命題に属するものが容認されたならば，その場合には，諸論証を進んで明確にすることが我々の仕事である。というのは，もし経験知 ἱστορία に即して，諸々の事物に真に属する事がらを一つも見失うことがないならば，我々はそれついての論証が存在するものすべてについて，論証を発見して論証し，それついての論証が本性上存在しないものについては，論証が存在しないことを明かにすることができるだろうからである。さて，以上で全体的な仕方で，どのような仕方で前提命題を選ばねばならないかが，ほとんど語られた。しかし，厳密には，我々は問答法に関する著作において詳しく述べたのであった。」(*APr.* I, c.30, 46a17-30)

ここでは，まず，「経験（知）」という意味で「探究」が用いられているとされるが，一般的には，「経験」はある調査・探究を構成するための重要な要因である[9]。つまり，「探究」としての ἱστορία には，ある問題に関して，何らかの目的をもって，個別的な事実を調査・探究するという意味，そして，ひとつの観察事実だけではなくて，ある観点から集められた観察事実の集積というニュアンスがある。広い意味での「経験」つまり「経験知」には，これと同じ意味があり，アリストテレスはここではその意味で「経験」または「経験知」と言っているのである。さらに，ここでは，論証を構成するための前提命題をいかにして選び取るかが問題となっているから，ある基準，つまり「経験知」に従って前提命題が得られれば，すでに論証が可能になるのであり，この点で「経験

[9] Bourgey, p.74, n(2) を参照。

知」は極めて重要な役割を果している。しかし，この「経験知」自体が論証を行なうのではなくて，学問的知識が獲得される過程としての論証において，その出発点を与えるという意味で重要なのである。さらに，前提命題を選ぶ厳密な方法については，問答法に関する著作，つまり，『トピカ』第1巻14章[10]で述べられたとされていることから，問答法における「通念 ἔνδοξα」との関係が問題になる。

4 まとめ

ἱστορία についての Riondato の3分類は，最初に述べたように，異なる2つの基準によってなされているので，実は，3) 可感的な個別の事象の観察が根底にあって，その対象を，大きく，2つに分けることによって，1) 人間の行為の記述と 2) 動物などの自然の実在の記述に分類されていると言うことができる。3) 可感的な個別の事象の観察が根底にあるというのは，ちょうど問答法が提出されたすべての事がらについて論じうるという性質をもっていることと通じている。『トピカ』では，学問的論証と問答法的推論を区別する基準の一つに，前提（命題）の違いがあり，学問的論証は真なる第一の前提に基づいて，問答法的推論は「通念」に基づいてなされることが述べられてる。しかし，これまで見てきたアリストテレスの記述からは，ἱστορία は，問答法的推論の前提よりもむしろ，学問的論証の前提を与えるかのような印象を与えるが，前提命題の選出については，アリストテレス自身は問答法に関する著作を挙げている点に疑問が生じる。しかし，このことには，学問的論証と問答法的推論の関係を考える上で，特に，前提命題の選出をめぐって，何か重要な示唆が含まれている。その解明は今後の課題としたい。

付記：小論は平成6年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

（日本学術振興会特別研究員・京都大学・哲学）

参照文献

[1] Bourgey, L., *Observation et expérience chez Aristote*, Paris, 1955.

[2] Düring, I., *Aristoteles: Darstellung und Interpretation seines Denkens*, Heidelberg, 1966.

[3] Maier, H., *Die Syllogistik des Aristoteles*, II-1, Tübingen, 1900.

[4] Mignucci, M., *Aristotele: Gli Analitici Primi*, Napoli,1969.

[10] Maier, S.304-305 を参照。Mignucci, p.465, n13 を参照。

[5] Riondato, E., *Storia e metafisica nel pensiero di Aristotele*, Padova, 1961.

[6] Siwek, S.J.P., *Aristotelis Tractatus de Anima*, Roma, 1965.

E